

AOI TORI BUNKO

講談社 青い鳥文庫

—大草原の小さな家シリーズ②—

大草原の 小さな家

ローラ=インガルス=ワイルダー

こだまともこ 渡辺南都子/訳

かみや しん/絵





講談社 青い鳥文庫 53-2

だいそうげん ちい いえ
大草原の小さな家

L=I=ワイルダー

こだまともこ 渡辺南都子 訳

1982年11月20日 第1刷発行

2000年5月31日 第50刷発行

(定価はカバーに表示してあります。)

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112-8001

電話 出版部 (03)5395-3536

販売部 (03)5395-3625

製作部 (03)5395-3615

N.D.C. 933 334p 18cm

装 丁 久住和代

印 刷 図書印刷株式会社

製 本 図書印刷株式会社

© TOMOKO KODAMA 1982

NATUKO WATANABE

本書の無断複写(コピー)は著作権法上
での例外を除き、禁じられています。

Printed in Japan

ISBN4-06-147106-6 (児二)

(落丁本・乱丁本は、講談社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえます。)

■この本についてのお問い合わせは、講談社児童局
「青い鳥文庫」係にご連絡ください。



——大草原の小さな家シリーズ[2]——

大草原の小さな家



ローラ=インガルス=ワイルダー／作

こだまともこ 渡辺南都子／訳

かみや しん／絵



講談社 青い鳥文庫

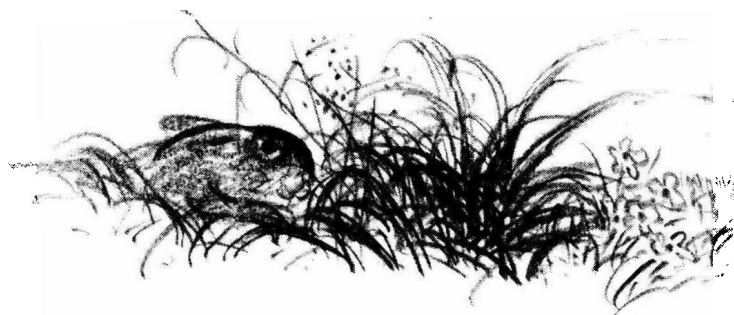
もくじ

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
テキサスの ロングホーン	おいしいの み水	インディアン が家に	やねと 床	だんろの 火	がんじょうな とびら	おおかみの むれ	ひっ こし	大草原の 家	大草原での 一日	大草原高地 でのキャンプ	クリークを わたる	西にむかっ て
156	142	126	116	105	98	80	70	52	40	19	5	



26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14

解説	インディアン	の	キャンプ	……	165
	お	こ	り	熱	…… 176
	えん	と	つ	の	火事
	……	……	……	……	193
	父	さん	、	町	へ
	……	……	……	……	203
	背	の	高	い	インディアン
	……	……	……	……	219
	エド	ワーズ	さん	、	サンタクロース
	……	……	……	……	に
	……	……	……	……	会
	……	……	……	……	……
	……	……	……	……	232
	真	夜	中	の	さ
	……	……	……	……	け
	……	……	……	……	び
	……	……	……	……	声
	……	……	……	……	……
	……	……	……	……	248
	イン	ディ	アン	の	大
	……	……	……	……	宴
	……	……	……	……	会
	……	……	……	……	……
	……	……	……	……	257
	大	草	原	の	火
	……	……	……	……	事
	……	……	……	……	……
	……	……	……	……	269
	イン	ディ	アン	の	と
	……	……	……	……	き
	……	……	……	……	の
	……	……	……	……	声
	……	……	……	……	……
	……	……	……	……	280
	イン	ディ	アン	が	去
	……	……	……	……	っ
	……	……	……	……	て
	……	……	……	……	い
	……	……	……	……	く
	……	……	……	……	……
	……	……	……	……	295
	兵	隊	が	く	る
	……	……	……	……	……
	……	……	……	……	306
	出	発	……	……	……
	……	……	……	……	316
解説	アメリカ	の	西	部	と
	……	……	……	……	イン
	……	……	……	……	ディ
	……	……	……	……	アン
	……	……	……	……	……
	……	……	……	……	330



Little House on the Prairie

by

Laura Ingalls Wilder

Text copyrights © 1935 by Laura Ingalls Wilder

第一章 西にむかつて

むかしむかし、みなさんのおじいさんやおばあさんが、小さな男の子や女の子だったころ、いえ、ちっちゃな赤ちゃんか、ひよつとすると、まだ生まれてもいなかったころ。父さんと母さんとメアリーとローラと赤んぼうのキャリーは、ウィスコンシン州の大きな森にある、小さな家をでていった。みんな、馬車にのっていつてしまい、大きな木を切りひらいた中になつた小さな家は、すむ人もなくぼつんととりのこされ、それからち、ローラたちとは、二度とあうことはなかった。

ローラたちの一家が目ざす先は、インディアン之国だった。

父さんは、大きな森には人がおおすぎて、もうだめだ、という。ローラの耳にも、しよっちゅう、父さんのおの音とはちがうおの音が、カーン、カーンとひびき、父さんの鉄砲とはべつ



の銃声じゆうせいが、バーンとこまりました。小さな家いへのそばをとるわだちのあとは、いまでは、広い道みちになつていた。毎まい日のように、ローラとメアリーは、遊ぶのをやめて、その道みちを、ギシギシと音おとをたてながらゆつくり走はしつていく馬車ばしゃを、目をまるくして見みつめていた。

こんなにおおぜいの人ひとがすむようになった土地とちには、野生やせいのけものたちはすみつかなくなつてしまふ。父とうさんだつて、すみたくはなかった。父とうさんは、野生やせいの生きものたちが、びくびくしないですめるような土地とちがすきだつた。かわいい子こじかと母ははさんじかが、暗くらい森もりの中から父とうさんを見みつめていたり、のろまの太ふとつちよぐまが、野生やせいの木きいちごのしげみで、いちごを食たべているのをながめているのがすきだつた。

長い冬ふゆの夜よる、父とうさんは母ははさんに、西部地方せいぶちほうのことを話はなしてきかせた。西部せいぶでは土地とちは平たいらで、木きもはえていない。草くさが、びつしりとたけ高くしげり、野生やせいのけものたちは、どこまでつづくのかわからないほどひろびろした牧場ぼくじやうにいるように、気きままに歩あるきまわつては草くさを食たべる。おまけに、すみついて畑はたけをつくつている人ひとは、ひとりもない。いるのは、インディアンだけ。

冬ふゆももうこれでおしまいというある日ひ、父とうさんが母ははさんにいった。

「おまえもはんたいしないようだし、西部せいぶにいつてみることにきめたよ。この家いへを売うつてくれつて話はながあつてね。いまなら、いままで思おもつていたうちで、いちばんいい値ねで売うれる。それだけあれば、新しい土地あたちででおすにもじゅうぶんだ。」

「まあ、チャールズ、もう、出発しなければいけないんですか？」

母さんはいった。まだ、寒さはきびしく、ぽかぽかの家の中は、とても居心地がいいのだ。

「もし、ことし、でかけようと思うなら、いまだけなければだめだ。」と、父さんはいう。「氷がわれたら、ミシシッピ川はわたれないからね。」

こうして、父さんは小さい家売った。牝牛と子牛も売った。ヒツコリーのぼうを弓形にまげたものを何本もつくり、馬車の荷台の両がわに、ぼうの両はしをまっすぐに立ててむすびつけた。母さんがてつだって、何本もならんだわくの上に、白いほろをかぶせた。

ほの暗い明けがた、母さんは、メアリーとローラを、そつとゆりおこした。だんろとろうそくのあかりの中で、母さんは、むすめたちの顔をあらって髪をとかし、寒くないように厚着をさせた。赤いフランネルの長い下着の上に、毛のペチコートと毛のワンピースと毛のくつしたをかさねる。その上に、オーバーをきせて、うさぎの毛皮のフードをかぶせ、毛糸の赤い手ぶくろをはめさせる。

小さな家のものは、ぜんぶ馬車につんであったけれど、ベッドとテーブルといすだけはのこっていた。父さんが、いつでも新しいのをつくれるから、この三つは、もっていかななくてもいい。土の上には、うっすら雪がつもっている。風はなく、暗くて寒い。はだかの木々が、こおりついたような星空を背にして立っている。けれども、東の空はうっすらと青みがかかり、灰色の森の

中から、馬車と馬につけたカンテラが近づいてきた。おじいちゃんとおばあちゃん、おじさんとおばさんといとこたちがやってきたのだ。

メアリーとローラは、ぬいぐるみの人形をすっかりだきしめるばかりで、なにもいえない。いとこたちも、ふたりをかこんで見つめてるばかり。おばあちゃんとおばさんたちは、ふたりをだきしめてはキスし、さよならいいながら、また、だきしめてキスした。

父さんは、馬車の上に弓形にはったほろの内がわの、いちばん高いところに銃をかけた。そこなら、馭者席から手をのばせば、すぐにとれる。たま（弾丸）のはいったふくろと、つの火薬いれも、銃の下にかけた。バイオリンのケースは、ガタガタゆれてもきずがつかないように、ていねいに、まぐらのあいだにしまった。

おじさんたちは、父さんに手をかして、馬を馬車につけた。いとこたちは、メアリーとローラにキスしなさい、といわれて、ふたりにキスしてくれる。父さんが、まずメアリーを、つぎにローラをだきあげて、馬車のうしろの、ふとんの上にすわらせる。母さんが、父さんの手をかりて馭者席によじのぼると、おばあちゃんが背のびして、赤んぼうのキャリーを手わたす。父さんは、ひらりととびのつて、母さんのとなりになすわり、ぶちのブルドッグ、ジャックは、馬車の下にもぐりこんだ。

こうして、一家は、小さな丸太小屋からでていった。まどには板戸がおりていたので、小さな

家は、みんなの出発を見送ることはできない。丸太のかきねの中に、じっとたたずんでいるだけだった。夏の日には、下で遊ぶメアリーやローラに、みどりの屋根をさしかけてくれた、二本の大きなかしの木かげで……。そして、これが、小さな家の見おさめだった。

父さんは、西部にいたら、かならず「パプーズ」を見せてあげるからね、と、ローラにやくそくした。

「『パプーズ』ってなあに？」

と、ローラは父さんにたずねる。

「『パプーズ』っていうのは、茶色いはだの、小さな、インディアンの赤んぼうさ。」

と、父さん。

一家は、雪のつもった森を長いこと走って、ペピンの町までやってきた。メアリーとローラは、前に一度きたことがあったのに、その日の町は、まるでちがうところのように見えた。お店のとびらも、家々のとびらも、みんなしめてあるし、切りかぶは雪にうずもれて、外で遊ぶ子どもたちのすがたもない。切りかぶのあいだには、材木が山とつみあげてある。ブーツに毛皮のぼうし、明るいこうしじまのオーバーをきた男が、二、三人見かけられるだけだった。

母さんとローラとメアリーが、馬車の中でパンと糖蜜を食べ、馬が、鼻先にぶらさげたふくろの中の、とうもろこしを食べているあいだに、父さんは店にいった、毛皮を、旅の生活にいりよ

うなものととりかえてきた。その日に湖をわたってしまわなければならないので、町でのんびりしてゐるひまはない。

はてしなく大きい湖が、灰色の空につづくかなたまで、まっすぐ、なめらかに、しらじらとひろがっている。その上を、馬車のわだちが、どこまでつづくのか、先も見えないほど遠くまでのびている。もしかすると、終点なんてないのかもしれない。

父さんは、いくすじもの馬車のあとをたどって、氷の上にのりだした。馬のひづめは、パカッパカッと、にぶい音をたて、馬車の車輪は、ギシギシときしむ。うしろに見える町は、どんどん小さくなっていき、背の高い店でさえ、小さな豆つぶになってしまふ。馬車のまわりは、どつちをむいても、しいんとしずまりかえつた、なにもない世界。ローラは、なんとなく、いやな気持ちになつてきた。でも、父さんは前の席にいるし、ジャックだつて、馬車の下にいる。父さんとジャックがいれば、なにがあつてもだいじょうぶ、と、ローラはじぶんにいきかせた。

やつとのもので、馬車は湖をわたりきつて、また、土の坂道をのぼりはじめた。木もはえてゐる。木かげには、小さな丸太小屋まである。それを見て、ローラはまた、気分がよくなつた。

その小さな家には、だれもすんでいなかった。キャンプ用の家なのだ。大きなだんろと、かんたんなつくりつけの寝だが、どのかべにもついてゐるだけの、せまい、へんな家。それでも、父さんがだんろに火をおこすと、あたたかくなつた。その夜、メアリーとローラと赤んぼうのキャ

リーは、だんろの前の床にしつらえた寢床で母さんとねむり、父さんは、馬と馬車の番をしながら、おもての馬車でねむった。

夜中に、ローラは、へんな音で目をさました。まるで、鉄砲をうつ音みたいなの、でも、それよりもするどくて長い音。何度も何度も、きこえてくる。メアリーとキャリーは、ぐっすりねむっている。でも、ローラは、母さんの声が、暗やみの中から、やさしくきこえてくるまで、ねむれなかった。

「おやすみ、ローラ。氷がわれているだけよ。」

つぎの朝、父さんがいった。

「きのうわたってしまつて、運がよかったよ、キャロライン。きょうになつて氷がわれたからつて、ちつともふしぎじゃない。あんなにおそくなつてからわたつたのに、湖のまん中あたりにいるときに氷がわれはじめなかつたなんて、じつについていたよ。」

「わたしも、きのう、そう思いましたよ、チャールズ。」

母さんは、しずかにこたえた。

ローラは、そんなことは、それまで、思つてもみなかつた。けれども、父さんの話をきいてから心配になつてきた。もし、氷が車輪の下でわれてしまつて、あの、広い湖のまん中で、つめたい水の下に馬車ごとしずんでしまつたら、いったいどうなつたかしら。

「チャールズ、だれかさんが、あなたの話をきいて、ぞっとしてるわ。」

母さんがいうと、父さんはローラをだきあげ、たのもしいうで、しっかりだきしめてくれた。「ミシシッピ川をわたったんだよ！」うれしそうに、ローラをだきしめた父さんはいった。「どうだい、のみかけのりんご酒の小びんちゃん？ インディアンですんでいる西のほうにいききたいかい？」

ローラは、いきたい、といつてから、もう、インディアンの国にきたの？ とたずねた。でもちがう、ここはまだミネソタ州で、インディアンの国ではない。

インディアンがすんでいる国は、まだまだ、ずっと先だった。毎日のように、馬は力のかぎりすすみ、毎晩のように、父さんと母さんは、新しい場所で野宿した。ときおり、ローラたちは、おなじ場所に、四、五日とまらなければならぬこともある。クリーク（大河の支流で、小川より大きい川）が洪水になつて、水がひくまでわたれないことがあるのだ。わたったクリークは、かぞえきれない。見たこともない森や丘をいくつも見かけ、一本の木もはえていない、もつとへんてこな土地もとおつた。長い木の橋をわたつて、いくつもの川をこえてから、黄色い水が流れる、大きな川にでた。ここには、橋がかかっていない。

これが、ミズーリ川だ。父さんは、いかだの上に馬車をのせた。しっかりした大地をゆらゆらとはなれないかだが、どろで黄色い水がうずまく川を、そろそろとわたつていくあいだ、みんな

は、じつと、馬車の中にすわっていた。

それから何日もたつて、また、丘と谷がつづく土地にでた。谷にかかったとき、馬車は、まっ黒などろのぬかるみに、どっぷりはまってしまった。雨がザーザーふり、かみなりがゴロゴロとなつては、いならずまが光る。あたりには、キャンプして、火をたくような場所はない。馬車の中は、なにもかもしめっぽくなり、寒くてみじめだったけれど、その中で、つめたい食べものを、ぼそぼそ食べるよりしかたなかった。

つぎの日、父さんが、丘の中腹に、キャンプのできる場所を見つけた。もう、雨はやんでいたので、あふれたクリークの水がひいてどろがかわき、父さんが、どろの中から馬車の車輪をはりだして、うごけるようになるまで、一週間はまたなければならぬ。

こうして、みんなであまっていると、ある日、背の高いやせた男が、黒い小馬にのつて、森の中からでてきた。父さんとその人は、しばらく話してから、つれだつて、森の中にはいつていた。そして、もどつてきたときには、ふたりとも、黒い小馬にまたがっていた。父さんは、つかれきつた茶色の馬を、この小馬ととりかえたのだ。

小馬は、とてもきれいで、小さかった。父さんの話では、ほんとうのポニー（小形の馬）ではなくて、西部生まれの、ムスタング（半野生の馬）という馬だった。

「この馬は、らば（ろばと馬の子とも）のようにつよくて、子ねこのようにおとなしいんだよ。」

と、父さんはいう。

ムスタングは、やさしげで、おとなしい大きな目に、ふさふさしたたてがみとしっぽ、すらりとした足。大きな森にいたときの馬よりずっと小さくて、すばやくうごく足をしている。

ローラが、この馬たちは、なんていう名まえなの、と父さんにきくと、メアリーとふたりで名まえをつけていいよ、といわれた。そこで、メアリーがペットという名を一つにつけ、ローラが、もう一つにパティーとつけた。クリークの水音がいくぶんおさまり、道がかわいてくると、父さんは、どろの中から馬車をほりだした。そして、ペットとパティーに馬車をひかせて、みんなはまた、旅をつづけた。

ほろをつけた馬車での旅は、ウィスコンシン州をでてから、もうずいぶんはかどり、ミネソタ州とアイオワ州とミズーリ州をすぎていた。その長い旅のあいだじゅう、ジャックは、馬車の下をとことこ走ってついてくる。これから、カンザス州を横切る旅がはじまるのだ。

カンザス州は、どこまでもどこまでもまっ平らで、風にそよぐ、背の高い草にうずもれていた。毎日毎日、馬車はカンザス州をすすみ、目にはいるのは、波うつ草と、はてしなく広い大空だけ。きれいに弧をえがいた青天じょうの下にひろがる、まんまるな大地。そのちようどまん中を、馬車は走っていく。

朝から晩まで、ペットとパティーは、前へ前へとすすむ。かけ足になつては歩き、またかけ足

